

## ドイツにおける集団妄想の系譜

浜本隆志

はじめに

一般にドイツ人は、秩序や法を守り、合理的な考え方をするとわれている。しかしその反面、ドイツ史を概観すれば分かるように、この秩序や合理性の対極ともいえるべき、不気味で非合理的な事象や集団妄想などが突発的に発生し、それによって多くの痛ましい犠牲者を出している。では不気味な事件や集団妄想とは、いったいどのようなものであったのだろうか。

まず、130人の子供たちが集団失踪した事件（1284年）に由来する『ハーメルンの笛吹き男』<sup>1</sup>伝説や中世の「子供十字軍」、「舞踏病」、「鞭打ち苦行」行進などは、規模は小さいとはいえ、その一種であるといえよう。しかし集団妄想の典型例としては、14世紀のペスト蔓延時のユダヤ人大量虐殺、16-17世紀に吹き荒れた魔女狩りなどが挙げられ、そのなかで無実の人たちが多数殺された。

さらに20世紀のヒトラーのナチズムなども、あきらかにその系譜に属し、未曾有の惨禍をもたらせた。これらのきわめて特異な現象は、一見すると個別に発生しているようであるが、しかしよくみると、その根はつながっていることが分かる。では、ドイツ史のなかでなぜ集団妄想が生まれ、これは相互にどのように関連しているのであろうか。

まずその解明の手がかりとなるのは、ドイツの精神史が示す特徴的な二極間の揺れである。すなわちドイツの思想史や文学史には、唯物論と

---

1 拙論「笛吹き男とヒトラー（1）」、関西大学『文学論集』第51巻第1号、2001年、63ページ以下参照。なお本稿「ドイツにおける集団妄想の系譜」は、「笛吹き男」伝説をも念頭に入れて構想しているが、すでに拙論で伝説を分析したので、ここでは重複を避けて触れない。

観念論、啓蒙主義や合理主義と非合理主義、啓蒙主義とシュトゥルム・ウント・ドラング、リアリズムとロマンティック、自然主義と反自然主義などの相反する極が、交互にあらわれるという特異な現象が認められる。

またドイツ人の心情には、北方民族の暗い内面性と明るい南欧へのあこがれという対立する局面もある。これらがいわゆるドイツの二極性といわれているものであるが、ゲーテも『ファウスト』のなかで、このアンビバレントなふたつの魂の葛藤をクローズアップしている。

たしかにドイツは、この二極の振幅のなかで矛盾を吸収しつつ、ようやく安定性を保ってきたのであるが、微妙なバランスは、天候不順、飢饉、戦争、黒死病、宗教的対立、失業などに直面すると崩れ、パニック現象が発生するといえよう。

その結果、世界観の亀裂や時代の危機によって、理性や合理主義に押さえつけられていたデモニッシュな負の側面が噴出し、奇妙で常軌を逸する事象があらわれるのではなからうか。この非合理主義的なマグマが、集団妄想を生み出す根源であるように考えられる。本稿では中世から現代にいたるドイツの歴史のなかで、具体的に集団妄想がどのように発生し、どう展開をみたのかを確認し、集団妄想生成のメカニズムを考察してみたいと思う。

## 第1章 中世ドイツの集団妄想症候群

**子供十字軍への熱狂** 中世史を概観すれば、集団妄想症候群ともいうべき一連のパニック現象が、断続的に発生していたことが分かる。まず十字軍運動の一部にも、すでにそのような集団妄想の兆候が認められる。よく知られているように、1096年に教皇ウヌバヌス2世が十字軍への呼びかけをすると、ヨーロッパ中に十字軍熱が波状的に広がっていった。この聖地奪回をめざす運動は、人びとを熱狂させ、キリスト教共同体を結束させる役割を果たしている。さらに十字軍は、騎士にとっては武功を挙げる活躍の場であり、民衆には贖罪をかねた聖地巡礼でもあった。

このような十字軍熱は、民衆や純真な子供たちへも波及していき、各地で民衆十字軍や子供十字軍が結成された。集団妄想の事例として、ここではまず、子供十字軍を採り上げたいと思う。『十字軍の歴史』にした

がえば、子供十字軍は最初、フランスのオルレアン出身のステファンという少年が、天からの啓示を国王に訴え出たことに端を発する。

彼はまだ12歳くらいの羊飼いであったが、1212年5月、「自分が羊の番をしていると、キリストがあらわれ、十字軍への呼びかけをせよ」<sup>2</sup>と命じられたという。国王はその訴えに耳を貸さなかったけれども、ステファンは神の啓示を実現するために、子供十字軍の結成を人びとに説いた。この少年は弁舌に長け、聖地エルサレムへも、モーセが奇跡を起こしたように海が開いて歩いていけると説教した。するとたちまち、何千人という人びとが彼のもとに結集したが、その大部分が貧しい農民出身の少年少女たちであった。ただし彼らのなかには、若い司祭、貴族出身の子供、年配の巡礼者たちもまじっていた<sup>3</sup>。

子供十字軍は、3つの金色のユリを描いた旗をなびかせながら、トゥール、リヨンをへて南のマルセイユへ向かっていった。大部分の子供たちは徒歩であったが、「予言者」ステファンは身なりをととのえて、飾られた馬車に乗り込み、そのまわりを貴族出身の少年が馬で護衛をした。しかしこの年の夏はことのほか暑く、行進は難渋を極めている。その結果、かなりの少年少女は途中で離散し、マルセイユへ着いたときには、その数が大幅に減少してしまった。さらにモーセの奇跡は起きなかったけれども、彼らは港町の市民の援助によって、何艘かの船に分乗し、エルサレムを目指している。その後、船が途中で難破し、生き残ったものたちが奴隷に売られたという、悲劇的な結末が伝えられている。

フランスでの子供十字軍結成の知らせは、2、3週間もするとたちまちドイツにも伝わってきた。それに感動したライン地方の田舎出身のニコラウスという少年が、ケルンの聖なる3人の王の祭壇の前で説教をはじめた。彼もステファンと同様に雄弁な少年であり、少年少女として最善のことをなすためには、聖地へいかねばならぬと説いた<sup>4</sup>。ニコラウスはさらなる有能な協力者を見つけて共に説いたので、子供たちが続々と集

---

2 Runciman, Steven: Geschichte der Kreuzzüge. München: Deutscher Taschenbuch, 1995, S. 916.

3 Vgl. Runciman 1995, S. 917ff.

4 Vgl. Runciman 1995, S. 919.

まり、わずかの週間のうちに数千人の大群となった。そのなかには多数の少女も混じていたという。

子供たちの群れは二群に分かれ、子供十字軍として行進していったが、その一群はニコラウスが率いる約2,000名のグループで、バーゼル、西部スイス、ジュネーヴをへて、アルプスを越えて地中海を目指していった。苦しい旅であったので、その数は途中で3分の1以下に減ったが、やがて子供十字軍はジェノヴァの海岸にたどり着いた。

翌朝、少年たちはモーセがしたように、海に向かって祈りをはじめた。彼らは「神がそれを聞き届けて、きっと海が目の前でふたつに割れ、道ができるもの」<sup>5</sup>と信じていた。しかし、いくら子供たちが祈っても奇跡は何も起こらず、多くの子供たちは失望して群れから離脱していった。



図1 子供十字軍

5 Runciman 1995, S. 920.

ところが、ニコラウスと残った子供たちは、別の場所なら奇跡は起こるであろうと考え、ピサへ移動した。そこにはパレスティナ行きの船が停泊しており、お金を持っていた何人かの子供たちは、それに乗り込んだ。

ニコラウスは後に残って、彼を信奉する仲間とともにローマへいき、イノセント教皇に拝謁した。彼らの熱狂は「称賛と無謀さ」<sup>6</sup>の両評価を受けたが、子供十字軍は、あまりにも大きな犠牲を払わなければならなかった。

もうひとつの別グループは、スイス中部を通り抜け、ザンクト・ゴットハルトを経由して、イタリアへ入った。窮乏生活を重ねながら、ようやくアンコーナでアドリア海に出くわした。ここでも彼らの祈りは通じなかったのので、東岸南端のプリンディジへいき、一部はパレスティナ行きの船に乗り込んだ。残った者は、もと来た道へひきかえしていったが、ドイツの故郷へ帰ることができた子供はほんのごく一部で、後の者の行方はほとんど分からない。

このように子供十字軍は、純真な子供の宗教的な熱狂と向こう見ずな未熟さがあいまって、いずれも不幸な結末を迎えている。しかし当時、大人の多くの人びとも十字軍に熱狂しており、社会全体に一種の集団妄想ともいべき現象を生みだす土壌があったといえよう。

**ドイツにおける狂信的異端狩り** 初期の異端狩りと異端審問は、とくにフランス、イタリアで苛酷であったが、それはドイツにも波及している。まず、1227年にグレゴリウス9世が教皇に就任すると、その2年後に、異端撲滅を宣言する。ドイツの異端狩りについては、このローマ教皇がドイツのヴァルド派を弾圧するために任命した、マールブルクのコンラート<sup>7</sup> (1180-1233) が大きな役割を果たした。当時、教皇が任命した異端審問官は、キリストと教皇以外に服従する必要がなかったので、強大な権力をもっていたからである。

---

6 Runciman 1995, S. 920.

7 Vgl. Charles Lea, Henry: Geschichte der Inquisition im Mittelalter. Bd. 2, Berlin: AKG, 1905, S. 370ff.



図2 異端審問官コンラート

さてコンラートは、1215年と1227年の十字軍への説教師として、教皇や皇帝の信頼を勝ち取っている。彼が説教をするときには、イエスのようにロバに乗って登場し、人びとの熱狂的な歓迎を受けたという。コンラートは熱烈なキリスト教者であり、金銭欲や名誉欲はなかったのも、その面では人びとの敬愛を得ていた。しかし他方、偏執狂的かつ残忍な性格の持ち主であったために、異端審問官となると、性格の悪い面が目立っている。

彼はドミニコ派と他の仲間とともに、最初は貧しい人びとに対して、異端審問をしていたが、そのやり方は恣意的、かつ独裁的であった。コンラート一派が真に恐ろしかったのは、彼らが狂信的なキリスト教徒で、自分たちの行為が絶対正義であると信じ切っていたことである。とくに彼は被告を執拗に審問し、証拠もないのに一方的に多くの無実な人びとを火あぶりの刑に処した。

コンラートは後に聖女となった敬虔なエリザベートに対してすら、些細なことで鞭打ちの刑に処した。彼女は後にマールブルクの聖エリザベート教会の祖となった女性である。

コンラートは異端者の財産処分について、一部を財産相続人、一部をその上位領主が受け取るというハインリヒ7世の政令をさらに徹底化し、すべてを上位相続人が受け取るように変えてしまった。彼らは密告を証拠として、貴族にも矛先を向けていった。異端審問に対する密告は、すでにラテラノ公会議以降、義務化されている。人びとは生きてまま焼かれるという恐怖から逃れるために、仲間の名前を闇雲に挙げた。こうなると芋づる式に被害者が拡大していった。

これは16-17世紀に起きる魔女裁判のプロトタイプであったといえよう。とくにドイツの魔女裁判は、支配者や裁判官の個人的資質に左右されることが多く、その意味でもよく似た状況がすでにここに生じている。ただし異端審問では、改悛の誓いをすれば、頭を丸めて命だけは助けられたので、この点が魔女裁判と異なるといえよう。

さらにマールブルクの異端審問の場合、理性もはたらいっていた。マインツ大司教、ケルン大司教、トリニア大司教たちがコンラートらのやり方に恐怖をいだき、1233年6月に自制を求めたからである。しかしそれには耳を貸さず、彼らは偏執狂的に異端狩りに突き進んでいった。当時まだ拷問は許されていなかったが、サデスティックな彼らは、すでに拷問を行使していたという。なお拷問は、公式にはイノケンティウス4世がその後の1252年に許可している<sup>8</sup>。

コンラートらは1233年7月に、中部ドイツの大領主ザイエン伯ハインリヒに対して矛先を向けていった。しかし逆に、反感を買っていた彼ら一派は闇討ちにあい、みじめに殺されてしまうのである。こうして狂気の異端狩りは終息を迎えるが、グレゴウリウス9世は、コンラートらを殉教者とみなし、殺された地に寺院を建てることを命じて、あくまで彼を擁護している。

**鞭打ち苦行の練り歩き** 十字軍運動よりすこし遅れて、鞭打ち苦行<sup>9</sup>という奇妙な運動がはじまった。この運動とペスト流行とのかかわりは、比

---

8 Vgl. Charles Lea, Henry 1905, S. 385f.

9 Vgl. Pleticha, Heinrich (Hrsg.): Deutsche Geschichte, Bd. 4. Gütersloh: Lexikothek, 1983, S. 239ff.

較的よく知られているが、実際にはそれよりかなり以前の13世紀ごろから出現している。震源地はイタリアといわれ、やがてオーストリアのケルンテン、シュタイアーマルク、ドイツのバイエルンにも伝わったとされる。

これは1261年に教会によって禁じられたので、一時沈静化したが、14世紀のペスト大流行の前後に、イタリア、アルプス山岳地方からフランス、オーストリア、ドイツ、オランダなどへふたたび広がっている。一説には東欧からドイツに伝播したともいわれている。

K・ベルクドルクの『黒死病』によれば、イタリアのドミニコ会士「ヴェントゥリーノはすでに1334年には、つまり黒死病発生の14年前に説教によって1万人のひとびとを鞭打苦行者の行進運動へ参加させたほどであった」<sup>10</sup>とある。ここでも鞭打ち苦行は、自然発生的というよりはむしろ、指導者を擁した統制のとれた集団であった<sup>11</sup>。

彼らの行動は特異であったので、その様子は図版などによって残されている。引用した図にあるように、苦行者たちは十字架と旗を掲げ、主への祈りを口にしつつ、手にもった鞭で我が身を打ちながら行進していった。彼らは素足で歩き、粗末なものを身にまとっているだけの集団であった。教会の前へくると、自分の罪を告白して、鞭打ちの行をおこなった。鞭の先には鉄製の釘がつけられていたので、それが皮膚に食い込み、血が吹き出した。皮膚は青くミミズ腫れになり、痛みがかえって法悦を生み出すというマゾヒズム的な苦行に、見物していた人びとは大きな衝撃を受けた。

鞭打ち苦行集団の広汎な伝播は、ヨーロッパに吹き荒れたペストの大流行と密接にかかわっている。ペストは14世紀から、とくに1348年、1360-61年、1373年、1400年、1482年と、周期的にかつ波状的にヨーロッパを襲い、少なく見積もっても人口の3分の1が犠牲になったといわれている。第二次世界大戦のヨーロッパの戦没者が、およそ人口の5パ

---

10 クラウス・ベルクドルト（宮原啓子・他訳）：『ヨーロッパの黒死病』国文社、1997年、164-5ページ。

11 Vgl. Kaiser, Gert (Hrsg.): Der Tanzende Tod. Frankfurt am Main: Insel, 1983, S. 30.





図3 鞭打ち苦行

ーセントであったことを比較しても、その惨禍のすさまじさがおのずから理解できよう。

まず1348年から本格的にペストが猛威をふるい、イタリアからヨーロッパ各地へ、衝撃的な速さで広がっていった。しかしその有効な対策もなく、死にゆく人びとの数だけが増えていった。大量の死者の山に直面した人びとはパニックにおちいり、これを神の罰と受け取った。それを思い知った多数の人びとは、死の恐怖と不安におののいて、贖罪のためにローマなどへ巡礼の旅に出た。その際、苦行をすれば、これは神の知ることとなり救済されるという信仰が広まったので、鞭打ち苦行者も巡礼に同行して、自分の身体を鞭で傷つけたのである。

1349年には、鞭打ち苦行がドイツ各地でも発生しているが、集団のドイツの移動ルートは次のように推定されている。まず、彼らは東方のザクセン、テューリンゲンのアイゼナハをへて、ヴェルツブルクへ入り、

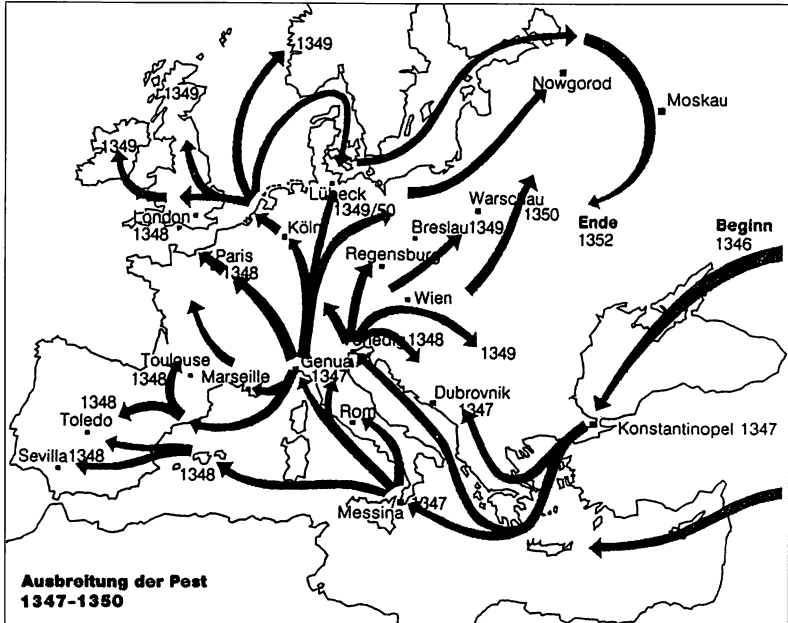


図4 ペストの伝播

そこから集団は二手に分かれ、一方はシュヴァーベン、バーデン＝ヴェルテンベルク地方の都市へ、他方はフランクフルトへ向かっていった。

鞭打ち苦行集団が都市へやってきて、その指導者が説教すると、自己の罪や不安におののく市民たちは、最初のうちは、援助の手を差し伸べている。公開の場での行であったので、それに加わる者が増え、群れはしだいに膨張していった。脅威を感じたローマ教皇や司教たちは、教会の権威をないがしろにする者として、鞭打ち苦行に対して禁止の布告を出したが、それを無視して、行進に同調する人が続出した。一方、エアフルトなどの都市は、市民への影響力を恐れ、やがて市門を閉め、彼らを追い払おうとしている。

鞭打ち苦行は当初、指導者に統率された集団で、放置されているペストの死者をも埋葬したので、町の人びとの尊敬を受けていたが、群れが大きくなるとやがて統制が効かなくなる。たとえばフランクフルトでは、

集団の一部は暴徒と化し、ユダヤ人の住居を襲撃して大量虐殺したり、暴動を起こしたりしている。これは本来の鞭打ち苦行者がおこなったのではなく、それに便乗した暴徒のせいだという風にもいわれているが、真相はその相乗効果の結果であろうと推測される。一群の暴行を阻止しようとする市民もいたけれども、それを逆恨みして、さらにパニック状態に輪をかけている。

また彼らの苦行集団が通りすぎると、農作物が不作になったり、逆にペストが蔓延したりしたので、人びとの間にこの運動に対する不信感が広まっていった。そうなるとこの運動は急速に衰退していった。

ペストの大流行が、鞭打ち苦行のトランス状態を引き起こす大きな要因であったことはすでに述べた。しかしさらにその背景には、イエスが人びとの犠牲となって、いばらの冠をかぶり、磔にかけられたというキリスト教の受苦の思想が存在する。鞭打ち苦行にはこのイエスの苦しみを追体験し、自己を浄化したいとする純粋な教徒の願いが込められていた。大きな危機や不安に直面した場合、人びとは告白、断食、贖罪の祈りだけでは、とうてい不十分であると感じたからである。こうしてペストのパニックともあいまって、極端な自虐行為が生まれたといえよう。

他方、鞭打ち苦行は、目にみえない悪魔に対する恐れのあるものであった。アニミズム時代では、シャーマンや祈祷師が悪魔払いをしていたが、キリスト教化してからも教会がその儀式をおこなっていた。すなわち悪霊が体内に取り憑いた場合、司祭がそれを鞭で追いだす行為もしている。同じことを鞭打ち苦行の指導者がおこない、これが贖罪を求める人びとに受け入れられたので、権威をないがしろにされた教会は、当然のことながらその悪魔払いを批判した。

**舞踏病** 踊りには仮面の踊り、豊饒の踊り、娯楽の踊りなどいろいろあるが、これらは異教的、また悪魔的なものとして、ローマ・カトリックによってすでに4世紀以来禁じられたり、批判されたりしてきた。教会は踊りのもつ陶酔的なオルギアを恐れたからである。しかし農民でも、貴族でも踊りの魅力は断ちがたく、祭りや結婚式のみならず、劇や会合の際の娯楽としてそれは連綿と続けられてきた。

舞踏病は何時間ものあいだ移動しながら激しく踊り狂い、疲労困憊し

て倒れるという事例が多い。ヴェーザー河畔のコルヴァイの年代記によれば、11世紀の初頭に18人の農夫が13人の女性たちと、クリスマスから年末にかけて踊り狂い、マインツ大司教、ヒルデスハイム司教、ケルン大司教たちが駆けつけ、ケルン大司教が神に祈ると、ようやく舞踏病から解放されたという<sup>12</sup>。さらに踊り手が聖職者を憎み、踊りながら激しく攻撃したが、悪魔払いと称して司教が祈祷すると、その発作は治まったという話も、キリスト教の側からの記述であろう。初期の舞踏病は、また墓地内で起きることが報告されている<sup>13</sup>。

次にエアフルトの年代記によると、1237年（一説には1236年）の7月15日に、当地で子供たちの舞踏病が発生した。およそ100人の少年少女たちが集まり、ダンスをはじめた。彼らは踊りながら市門を出て、シュタイガーヴァルトを経てアルンシュタットまでいって、疲れ果て倒れて痙攣を起こした。子供たちがいなくなったことに気がついた両親たちは、大騒ぎをしてあちこち捜し回り、ようやく翌日アルンシュタットでの騒動を聞きつけた。すぐ駆けつけてきた両親が子供たちを見つけ、荷馬車で連れ帰ったけれども、そのうち何人かは震えが残ったり、死んだりしたという。

エアフルトの舞踏病の理由として、ヘッカーは1231年に死去したエリザベートがグレゴリウス9世によって聖女とされたので、マールブルクで列聖式があり、人びとが熱狂的に彼女を崇拝したからであるとしている<sup>14</sup>。事実、先述した聖女エリザベートは、『黄金伝説』にも多くのエピソードが記載されているように、献身的な貧民への奉仕によって、多くの民衆に敬慕されていた。聖別式の盛大な儀式は、彼女に対する異常な崇拝熱を盛り上げたが、それは裏を返せば、当時の人びとの日常生活における不安な心理状態を反映していると考えられる。

エアフルトに続いてウートレヒトでも、橋の上で1277年にさまざまな人たちが踊り狂い、衝突して200人が河に落ちて溺れ死んだ（いささか

12 Vgl. Krogmann, Willy: Der Rattenfänger von Hameln. Berlin: Emil Ebering, 1934, S. 42.

13 Vgl. Krogmann 1934, S. 65.

14 Vgl. Krogmann 1934, S. 65.

誇張であろうが) 事件が報告されている。またリンブルクの年代記によれば、1374年の夏にドイツのライン、モーゼル地方で、さらにケルンで500人以上が、アーヘンでも多数がダンスをして荒れ狂い倒れ、一部の人びとが死ぬという不思議な光景がみられたという。

この時代の舞踏病は、聖ヨハネの夏祭りにおきることが多かったので、「聖ヨハネの舞踏」(あるいは「聖ファイトの舞踏」)<sup>15</sup>ともいわれていた。陶酔状態は祭り音やリズムによって助長される傾向が強く、とくにこの現象は、北部・中部ドイツ、ベルギー、オランダなどに多く発生している。それは北欧の人びとの精神的風土によるものか、あるいは音楽に対する人びとの感受性と関係しているからであろうか。いずれにせよヨーロッパでは舞踏病は、17世紀ごろまで間欠的に出現した現象であった。

**死の舞踏** 14世紀なかばごろから、「死の舞踏」といわれる骸骨と人間がダンスをしている絵が、フランス、イタリア、ドイツ、スイスにあらわれた。フランスではこれは「ダンス マカブル」として知られているが、とくにドイツではミンデン、リュベック、ドレーズデン、スイスではバーゼルに原画があったとされる<sup>16</sup>。これらは当時流行した舞踏病や鞭打ち苦行がモチーフになって、死が世界を制覇した一種の時代風潮をつくりだしている。たとえばその関連性は、鞭打ち苦行が盛んであった北部イタリアの各地の教会に、「死の舞踏」の壁画が残されていることから指摘されよう<sup>17</sup>。

現在では、教会あるいは修道院の壁画として書かれた原画は、ほとんど消滅してしまい、写しや後から描いたものしか残っていないが、それでもこれらを見れば、教皇、国王、貴族であろうと農民であろうと、死は貴賤、老若男女を問わず、すべてを黄泉の国へ誘う様が描かれている。まさに「死の勝利」そのものの世界である。これは強烈な社会風刺や体制批判につながる側面をもっていた。というのも、教会や封建社会のヒ

---

15 Krogmann 1934, S. 42.

16 Vgl. Lexikon des Mittelalters VIII, Stuttgart Metzler, 1999, S. 1447.

17 Vgl. Hammerstein, Reinhold: Tanz und Musik des Todes. Bern: Franke, 1980, S. 11ff.

エラルヒーや権威は、死を前にすればまったく無意味であり、とくにペストによって、キリスト教の威光も完全に失墜していたからである（以下の図参照）<sup>18</sup>。

さらに絵をよくみれば、死のシンボルの骸骨は、生き生きとして生命力あふれ、表情ゆたかに描かれているが、他方、生きて人間は不安に駆られ、途方に暮れている。その属性をあらわす王冠、王笏、司教冠、



図5 死の舞踏

18 Vgl. Kaiser, Gert (Hrsg.): Der tanzende Tod. Frankfurt am Main: Insel, 1983, S. 9ff.

剣などの権威のシンボルも、死の前では何の役にも立たないのである。若い子供とて、その例外ではない。これは死と生の逆転した「逆さまの世界」をあらわしているといえよう。よく知られているように、カーニヴァルの際にも愚者が王に、乞食が大金持ちにという「逆さまの世界」が展開されていたが、ここにはそれとつながる非日常の世界が示されているのである。

骸骨はペスト、あるいは地獄の悪魔やデーモンを示しているが、その多くが楽器をもっている。G・カイザーによると、あらゆる種類のフルートやシャルマイ、トランペットに似たツィンク、打楽器の太鼓、タンバリン、ティンパニーのたぐいが、悪魔やデーモンに結びつくものとされていたという<sup>19</sup>。

おそらく自然の音に近いものが、異教的、かつ不気味なものと解釈され、悪魔の属性とみられていたと考えられる。「死の舞踏」の絵をみても、音楽は悪魔と結びついて描かれていることがよく分かる。それは延いては、現世の楽士の社会的身分もあらわしており、楽士が悪魔と通ずる得体のしれない者として、さらにその連想から恐ろしい者として、差別されていることがここからも理解できよう。

さらに「死の舞踏」を図像学的にみれば、中世に発達した紋章学の影響を強く受けていることが分かる。すなわち、死のシンボルである骸骨は、ふつう左（図像学上、逆にこれが右という）に位置している。このように、図像学（紋章学）の右が優位という原則にもとづき、死が容赦なく人びとをつれ去ることが示されている。また、地獄や死の属性としてヘビ、ヒキガエルがよく登場する。なお、「死の舞踏」は終末観とメモント・モリ（死を思え）につながり、これが近代初期芸術にも大きな影響をおよぼしていくのである。

ペストとユダヤ人襲撃 ユダヤ人はヨーロッパへ移住して以来、長年にわたる差別と迫害の歴史をもっているが、泥棒、傷害・殺人事件、暴動、火事、疫病、物価暴騰、暴落などが生じたとき、かれらはつねにその犯人に仕立てあげられ、身に覚えのないスケープゴートにされることが多

---

19 Vgl. Kaiser 1983, S. 60.

かった。

すでに1215年の第4回ラテラノ会議では、「ユダヤ人を独自の身なりによって社会から区別する」ための決議がおこなわれている。その後、ウィーンの聖務院でも、ユダヤ人とすぐ見分けがつくように、「とんがり帽子をかぶらねばならなかった」<sup>20</sup>が、その色はたいい目立つ黄色とされた。先述のように十字軍の派遣の際も、ユダヤ人は大きな迫害を被っている。

ペストの惨禍は、ヨーロッパ規模にわたるユダヤ人迫害をも生み出した。ペストの不安におののく住民たちは、ユダヤ人が泉に毒を投げ入れたというデマによって、各地でユダヤ人を襲撃している。また彼らが、キリスト教の聖なるパン（ホスティア）を盗んで、侮辱しているといううわさ、ユダヤ人が子供を誘拐し、ユダヤ教の儀式の犠牲にしているなどのうわさが飛び交った。

それがピークをなすのは、1348-49年の最初のペストの大流行のときであった。民衆の根柢のないうわさにもとづき、ユダヤ人が捕らえられ、拷問の結果、毒をばらまいたことを自白させられ、それを契機に、フランス、スイス、ドイツなどで類似した大迫害がおきているが、とくにライン河畔一带のユダヤ人虐殺は大々的で、中世最大の惨禍をもたらせている<sup>21</sup>。

たとえばベルクドルトによると、1349年にシュトラースブルクで2,000人のユダヤ人が殺され、1349年1月にはヴォルムスで400人、エアフルトで100人が殺され、3,000人が追い詰められて焼死した。ライン河畔ではないが、ニュルンベルクでも同じ時期の1349年12月に、約600人が焼き殺され、その跡に聖母教会が建てられている<sup>22</sup>。まさに判で押したように、虐殺は1349年に集中していることが分かる。この数字は年代記によるものであるので、それ以外確証の手掛かりはないが、ペストの大量死というなかで、異常な社会的・心理的状況がユダヤ人迫害の背景にな

---

20 Pleticha, Heinrich: Ritter, Bürger, Bauersmann. Würzburg 1985, S. 224f.

21 Vgl. Schormann, Gerhard: Der Krieg gegen die Hexen, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1991, S. 12f.

22 ベルクドルト1997年：202ページ以下参照。



っていたことはまちがいない。

ユダヤ人は都市では特定地区に居住していたが、閉鎖社会のなかでユダヤ教を信じ、シナゴグへ通って、キリスト教に同化しようとしなかったものが多かったため、孤立化し誤解を生みやすかったといえる。平穏な時代ではこれほど極端なユダヤ人虐殺（ポグロム）は起きないけれども、ペストによる大量死という背景によって、冷静かつ理性的な行動をとることができなくなっていることが示されている。一挙にすべてのユダヤ人を抹殺しようとして、人びとは囲い込んで焼き尽くすという蛮行をお

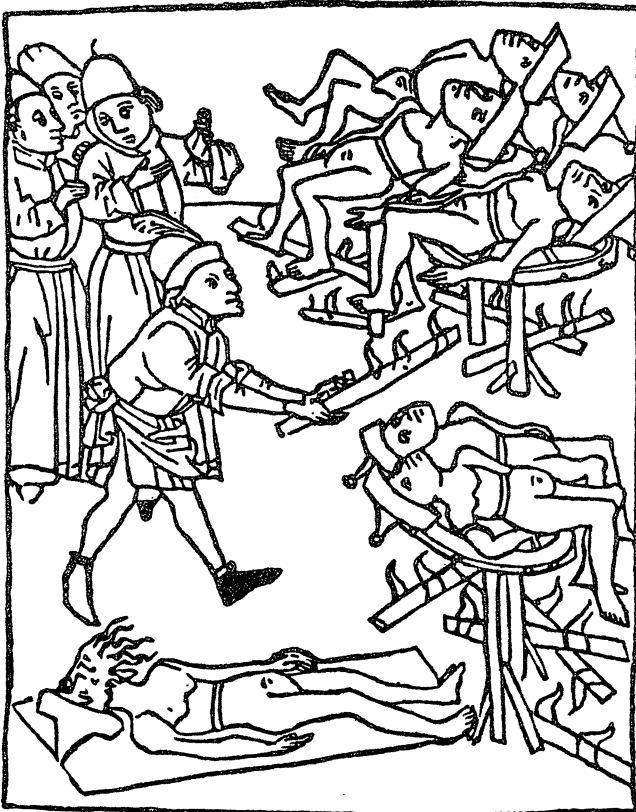


図6 ユダヤ人虐殺

こなったのである。まさしく集団パニックの恐ろしさを示す典型例であろう。

よく似た事例が多いのは、ペストに対する恐れの深刻さを物語っている。町中のユダヤ人を皆殺しにしたり、追い詰められたユダヤ人たちが集団自殺している事例が多く、これも民衆の不満や怒りの矛先が、差別されていたユダヤ人に向けられた例である。市門は閉ざされ、逃げ場を失ったユダヤ人は、なかに入ることは許されなかった。

王侯や高位の聖職者たちはペストの広がっていない地域に避難し、身の安全を確保した。親ユダヤ的な世俗の支配者は、一部はユダヤ人を保護しようとしたが、それはユダヤ人を生かしておいて、彼らから税金を取り立てることができたからである。またカール4世や一部の支配者たちは、虐殺されたユダヤ人の財産をねらった者もいた。魔女裁判のときにも、同様に魔女として処刑された者の財産がねらわれたことがある。

いずれにせよ、世俗の支配者の思惑よりも、パニックのときの群集心理の圧力の方が大きく、彼らは日ごろの鬱積した感情を剥き出しにして、一気にユダヤ人を根絶やしにしようとした。それは十字軍、鞭打ち苦行行進のときに起きたユダヤ人迫害と同じ図式である。この時代のユダヤ人虐殺は、われわれが後で検証する魔女狩りのときの女性や子供への攻撃や、ナチス時代のユダヤ人虐殺の前史であると位置づけることができよう<sup>23</sup>。

集団妄想の歴史をたどっていくと、パニックが発生したときには、弱者を攻撃するという悲しい人間の心理が、時代が変わっても何度も何度も、繰り返されていたことがあきらかとなる。

## 第2章 魔女狩りと集団妄想

ヴァルプルギス伝説の幻想 魔女伝説のうちでもっとも有名なものは、ドイツ中部のハルツ山地の最高峰、ブロッケン山の魔女の饗宴（サバト）である。この山は標高1,142メートルで、山頂には岩がゴツゴツととび出た「魔女の踊り場」があり、ここには霧が出て妖怪現象がおきるとされてきた。そのような不気味な気候条件からか、5月祭の前日にあたる4

---

23 Vgl. Schormann, Gerhard 1991, S. 15f.



図7 サバトに集まる魔女たち

月30日に、各地から魔女が集い、サバトを開いていたという伝説が生まれたと考えられる<sup>24</sup>。

これはヴァルプルギス伝説といわれ、魔女迫害の時代には、人びとは本気でサバトの存在を信じていた。このサバトを描いたとされる有名な絵が残っているので、それをここに示しておこう。

伝説によれば、魔女はホウキに乗って飛行し、各地からこの山上にやってくる。そこには中央の台に乗ったヤギのような悪魔が待ち構えている。魔女はその尻にキスをし、悪魔と契約を結ぶといわれているが、これは悪魔との結婚を意味する。やがて悪魔と魔女たちは、宴会をはじめ、みんなは幼児の肉を食べ、血を飲み、汚辱の食事を楽しむ。次はダンス、そのあと魔女は悪魔と性交し、最後にサバトでは乱行のオルギアが繰り返

24 Vgl. Löblich, Eberhard: Hexenleben. Halle: Mitteldeutscher, 2001, S. 65ff.

ひろげられる。この場面はとくに、『ファウスト』のヴァルブルギスの夜でも描かれ<sup>25</sup>、ゲートによって魔女のサバトは一般によく知られるようになった。

もともと魔女伝説は、聖燭祭、5月祭、収穫祭、ハロウィーンの前日に、魔女たちがこれらの祭りを嘲笑して集まり、サバトを開いたという言い伝えにもとづく。しかしこれはキリスト教化されたのちの話であって、それ以前では魔女の祭りではなく、もともと女神による豊饒信仰の祭りであったとされる。そのうちの5月祭のひとつが、最後までキリスト教化を拒んだハルツ地方に残ったといわれている。その意味からも、このルーツはケルトかゲルマンの異教的なアニミズムにもとづくものであったと推測される。

現在でも、ヴァルブルギスの饗宴にちなんで、4月30日から5月1日にかけて、この地方ではお祭りが開かれている。本来はブロッケン山頂での祭りであったが、おそらく自然保護のためであろうか、近年、それが禁止されているので、祭りはふもとでおこなわれている。したがってヴァルブルギス祭りはひとつだけでなく、ゴスラー、シールケ、ヘクセンタンツプラッツなど各町が本家争いをしている状態である。

ここでは仮装した魔女の劇が演じられ、屋台や出店が並び、魔女人形のおみやげなどが名物になっている。その意味では、ヴァルブルギスの饗宴は一種の観光化され、ハルツ地方ではもはや暗い過去の魔女弾圧の陰惨さはどこにもない。しかしこの地で魔女弾圧のシンポジウムを開いたりするところが、過去の負の遺産を直視するドイツらしいところである。これは戦争責任を徹底して追求する姿勢と同じ根をもつものであるといえる。

仮装した魔女は、現在では祭りの道化役として登場し、客寄せの目玉の役割をはたしているが、その次元でのみ魔女を理解するならば、魔女狩りの残酷な暗黒の歴史を看過することになる。したがって、ヴァルブルギスの祭りやその伝説の背景にある、史実の魔女狩りの実態をここで概観しておく必要があると考える。

---

25 Vgl. Goethe, Johann Wolfgang: Fünfter Band der Gedenkausgabe, Zürich Artemis-Verlag, 1950, S. 263ff.

ドイツの魔女狩り 魔女はグリム童話でも、森に住む者として馴染み深い。農村や山間部では人びとは、アニミズムにもとづく呪術や迷信を信じていた。これらを司っていたのは、「賢い女性」といわれた巫女、あるいは女予言者であり、彼女たちはさらに薬草の知識をもち、産婆の役割をも果たしていた。したがってこの特別な能力をもった女性たちは、かつて村人たちの尊敬を受けており、病気や出産の相談相手でもあった。

ところがキリスト教化され、教会の絶対的な権威が確立されると、「賢い女」の特殊な能力は、キリスト教にとってみれば目障りとなってくる。しかも宗派内で異端が多発したり、とくにルターの宗教改革後、カトリックとプロテスタントが対立したりするようになると、彼女たちは両派にとって格好の攻撃目標となっていく。こうして「賢い女」は教会からしだいに弾圧され、森や人里離れたところに追いやられた。魔女が年老いてひとりで森のなかに住んでいるという伝説は、このようななかから生みだされてきたのである<sup>26</sup>。

さらにキリスト教化されても、農民は昔ながらの民間信仰を捨てずに、魔女が不作、天候不順、家畜の不妊、奇形児の出産のまじないをしていると信じ、当局へ訴え出た<sup>27</sup>。これは「天候魔女」<sup>28</sup>といわれ、魔女狩りのルーツとされる。ドイツで魔女として槍玉にあげられたのは、はじめは「賢い女」の末裔や、孤独に暮らしている老婆、変人、嫌われ者という弱者であった。したがってドイツでは、初期の魔女狩りは山間部や中小都市に集中し、大都会にはきわめて少なかった。

中世ではカロリーナ法が裁判のルールを定め、被告に対しても証人をたてて弁明することが許され、この法は無差別な魔女狩りの歯止めの役割を果たしていた。しかし、1486年に出版された『魔女への鉄槌』<sup>29</sup>が、魔女狩りの大きな転機となった。これはドイツ人のシュプレンガーとイ

---

26 Vgl. Gloger, Bruno, u. a.: Teufelsglaube und Hexenwahn, Wien: Böhlau, 1999, S. 124ff.

27 Vgl. Löblich 2001, S. 71ff.

28 Löblich 2001, S. 60.

29 Vgl. Sprenger, Jakob u. a.: Hexenhammer, Holzminden: Verlag-Leipzig, 1937/38, S. VIIff.

ンステイトーリス（クレーマー）によって書かれ、魔女狩りのための悪質なパイブルとされた文書である。

『魔女への鉄槌』を契機に、魔女の嫌疑をかけられたものに対する法的権利はしだいに無視され、一方的な裁判が展開されるようになった。ローマ・カトリックもこの本を容認し、魔女狩りを積極的に提唱したので、裁判官はそのお墨付きにもとずき、躊躇することなく死刑判決を出すことができた。

**集団妄想の狂気** やがて密告や証人によって、女性たちが魔女として次つぎと訴えられた。魔女の容疑者に対する尋問官も、先入観をもって取り調べをおこなった。自白しない場合、魔女に対する残酷な拷問が加えられ、その際、容疑者を水の中へ浸け、浮けば魔女、沈めば魔女でない、という水審もよく知られている。女性たちは拷問により、無理やり尋問官の期待するサバトでの密会を自白させられた。ただしどの裁判官も、サバトを実証したものはいない。



図8 水審

それでも当局や教会のみならず、農民や市民たちも魔女の存在を信じ、社会全体が集団妄想にかかって、狂気が蔓延していった。その結果、16-17世紀にかけて魔女狩りがピークを迎えるのである。とくに中部ドイツでは、「1626-31年が最高潮」<sup>30</sup>を記録している。

こうして拷問と処刑という狂気の日々が続いた。魔女狩りの被害が爆発的に拡大したのは、拷問によって彼女たちが仲間の名前を白状することを強要されたからである。拷問の際に、いろいろな甘言がささやかれた。たとえば自白すれば、家族に罪がおよばないとか、財産没収を免れるとかいわれた。

拷問にかけられた者は、楽になりたい一心で、苦し紛れに次つぎと無実の女性の名前を挙げた。たとえば「容疑者」が共犯者を自白したデータが残っている。トリーアでは306人の告発された魔女のうち、平均するとひとりが20人の名前を挙げ、合計1,500人の共犯者が検挙されている<sup>31</sup>。このようにして、芋づる式に魔女が増えて、被害は身分の高い女性、子供たちにもおよんでいった。

魔女の犠牲者は時代や地域に片寄りがあるが、17世紀前半にカトリック地域のバンベルクで600人、ヴェルツブルクで1,200人、マインツ選帝侯国では、1,000人、シュトラースブルクで5,000人などの数字が挙げられている<sup>32</sup>。ここでは大司教、司教が魔女狩りに大きな役割を演じている。

むろんカトリック地域だけでなく、プロテスタント地域の「シュレースヴィヒ=ホルシュタインでも、1530-1735年間に846の魔女裁判が確認できる」<sup>33</sup>。同じプロテスタントのフルダでも、1603-5年の短期間に205人などの犠牲者を出している。なおドイツ全体で犠牲者の数は、比較的少ない統計でもおよそ数万人と見積もられている。

魔女裁判では、大量の女性たちが魔女の嫌疑で処刑されているが、い

---

30 Schormann 1991, S. 9.

31 Vgl. Levack, P. Brian: Hexenjagt. München: C. H. Beck, 1995, S. 166.

32 Vgl. Dörrzapf, Reinhold: Eros, Ehe, Hosenteufel. München: Deutscher Taschenbuch, 1995, S. 117.

33 Schulte, Rolf: Hexenverfolgung in Schleswig-Holstein vom 16.-18. Jahrhundert, Heide: Boyens, 2001, S. 67.



図9 魔女の火あぶり

うまでもなくこれは、教会と裁判所当局が人為的に捏造した冤罪であった。しかも見せしめのために公開処刑されたので、人びとはこわいもの見たさに処刑場に見物にきた。拷問によって自白させられたスケープゴートは、魔女と断定され、荷車に乗せられて、刑場へ引かれてくる。そこへ着くと処刑の儀式が始まる。まず罪状の朗読がおこなわれ、聖職者による最後の説教が終わると、刑吏が処刑にとりかかる。

もっとも刑の重い者は生きたままの火あぶりであったが、これは死の苦痛が長引くので、罪人はどんなことをしても火あぶりだけは免れようとした。次に絞首刑はやや軽い刑で、剣による斬首は「慈悲ある」刑であった。いずれにしても魔女は最後には焼かれたが、その後、見物の農民たちは村で酒を飲んだ。このおぞましい処刑光景は、異端審問の場合



ほど大々的な「死の祭典」ではないにせよ、当時の人びとにとっては「祭り」の儀礼の一種とも解釈できよう。しかし悲劇であったのは、人びとが「集団ヒステリー」を自覚していないことであった。

**魔女狩りの子供への伝播** 魔女狩りに子供が関与したという事実は、まだあまり知られていない。しかしバシュヴィッツやH・ヴェーバーの研究によれば、驚くべき事実が明らかになっている。多くの子供たちも魔女裁判に巻き込まれ、拷問をも受け、悲惨な最期を遂げていることが指摘されている。

また裁判の証言では、一般に子供たちは純真で無邪気であるので、魔女裁判で子供が虚偽の証言をしたりすることがないと考えられてきた。ところが事実はそうでなく、子供たちは裁判において、「友達、隣人、親戚、両親、自分自身」<sup>34</sup>すら魔術を使ったという証言を、強制や脅迫なしに、自発的にしていた事例も裁判記録から明らかになっている。

したがって子供魔女は、加害者の役割を果たし、それが大人の魔女狩りの契機となったことも、近年、ようやくあきらかになってきた。子供が魔女狩りに関与した理由は、大人になりきっていない子供の不安定な精神状況、子供の狂信性、性の問題、教育、家庭環境など複雑であるが、このような子供による魔女告発は、とくにヴェーバーなどによって、研究がようやく緒についたばかりである。

西南ドイツの17世紀のヴェルテンベルクでは、子供に対する魔女裁判記録が多数残っている。ここは領主の宗教を領民が信じなければならないという宗教政策のため、おもにプロテスタントの地域であった。「ヴェルテンベルクの192の魔女裁判のうち、子供が関与したものは32件」であるが、年齢は4歳から17歳、子供の被告は合計39人、女の子が21人、男の子18人であった<sup>35</sup>。

裁判の判決は、他のカトリック地域よりは比較的穏やかである。2名が死刑で、19人が1カ月以内の監獄行き、7人が3カ月の監獄行き、5

---

34 Weber, Hartwig: Von der verführten Kinder Zauberei. Sigmaringen: Thorbecke. 1996, S. 66.

35 Vgl. Weber 1996, S. 103.

人が6カ月以内、4人が1年以内、2人が1年以上とのことである。その際、多くは鞭打ちの刑を課せられ、これによって悪魔を追い出し、キリスト教徒に立ち直らせようとした<sup>36</sup>。

ところが他の地方の記録によると、圧倒的に被害者としての子供魔女のケースが多い。先述のように、ヴェルツブルクは魔女狩りが荒れ狂った町として知られているが、当地の裁判記録には、少年、少女の未成年の処刑が報告されている。1627年から29年までの火あぶりのリストがあって、最初は数名の老婆からはじまり、13回目あたりから子供やギムナジウム生徒の処刑が目立ち、20回目にはヴェルツブルク一の美少女と他の3名の少年、その後、ほとんど毎回2-4名の子供も犠牲になって、処刑は29回まで続いている。そのうち10歳以下の子供の火あぶりは、20名以上にのぼるといふ悲惨な状況であった。やがてスウェーデン軍の侵入を背景にして、ヴェルツブルクの司教が魔女裁判中止命令を出すことによって、この嵐はようやく1631年におさまっている<sup>37</sup>。

またザルツブルクで1675年から81年のあいだに、199人の浮浪者が魔女や盗みのために処刑されているが、そのうち3分の1は15歳以下であったという。ようやく17世紀のなかばになって、「7歳を越えない子供は、若い魔女あるいは魔法使いの科で、法的な罰を科してはならない」<sup>38</sup>という旧法が復活したのである。

### 第3章 ヒトラー・カルトの成立

**ヒトラー・ユージェントへの熱狂** 集団妄想の系譜からみれば、ナチスの登場はドイツ史のなかで、特異な現象でも突発的な出来事でもない。たとえばナチス親衛隊長のヒムラーは、魔女大量虐殺の歴史をユダヤ人抹殺に応用しようとしていた事実<sup>39</sup>があるが、これはナチスの残虐性と魔女裁判の親近性を示唆するものであろう。このようにドイツにおける集

---

36 Vgl. Weber 1996, S. 103f.

37 Vgl. Baschwitz, Kurt: Hexen und Hexenprozesse. München Deutscher Taschenbuch. 1966. S. 224ff.

38 Vgl. Weber 1996, S. 86.

39 Vgl. Lorenz, Sönke u. a.: Himmlers Hexenkartothek, Bielefeld: Verlag für Regionalgeschichte, 2000. S. 1ff.

団妄想の歴史には、いくつかの連続した現象がみられるのである。

すでに触れたように、笛吹き男におびき寄せられた子供たち、子供十字軍、子供を巻き込んだ魔女狩り、という子供の集団妄想の系譜をたどっていくと、その延長線上にヒトラー・ユーゲントが位置づけられる。これは子供たちがあまりにも誘惑や扇動に動じやすいことを示す例であるといえる。とくに、個がまだ確立されていない子供たちは、情緒的なキャンペーンにもっとも大きな影響力を受け、集団妄想におちいりやすかったのである。

まずヒトラー・ユーゲントのルーツは、ナチスの青年部として1922年にミュンヘンで設立された。たしかに初期の組織は自然回帰を目指し、野外キャンプ活動を推奨したことから、これまでにこの運動と19世紀末のワンダーフォーゲル運動が、よく比較の対象とされてきた。むろんワンダーフォーゲル運動は、ヒトラー・ユーゲントの前身ではないが、間接的に関係があったといえる。ワンダーフォーゲル運動のなかの右翼的・民族的特性が、ヒトラー・ユーゲントに流入しているからである。

ヒトラー・ユーゲントは、正式には1926年に成立した。ヒトラーはナチスの党組織を強固なものにするために、親衛隊、突撃隊、少年少女の組織などを創設したが、とくに後者は、未来を築く若者をターゲットにし、将来のナチスの中核を担う人材を育てようとした点に、大きな特徴がある。一糸乱れぬ行進、制服、短剣、バックル、ヒトラー・ユーゲント旗、音楽隊などは、当時の若者のこころを魅了するのにじゅうぶんであった。

こうして若者たちは熱に浮かされたように、競ってヒトラー・ユーゲントに入ってしまった。ヒトラーへの個人崇拜、ナチスの党綱領の暗唱、厳格な規律、軍事訓練などの苛酷な要求を、少年たちは喜々としてこなした。かれらは鉄の意志をもった、一種のヒトラー・カルトの熱心な信者に変った。つねに戦闘訓練を受けていた彼らは、戦争が始まれば、当然、戦場におもむき、もっとも危険な前線へ配置され、その結果、多くの若者が戦死をしたのである<sup>40</sup>。

---

40 Vgl. Levis, Brenda Ralph: Illustrierte Geschichte der Hitlerjugend. Wien: Tosa, 2001, S. 7ff.

なお、団員の急激な膨張のプロセスは、以下に挙げたとおりである。

1922年 3月	ミュンヘンにて設立	1936年	5,400,000人
1932年	108,000人	1937年	5,800,000人
1933年	2,300,000人	1938年	7,000,000人
1934年	3,600,000人	1939年	8,700,000人 <sup>41</sup>
1935年	3,900,000人		

この数字から理解できるように、ナチスが政権を取るまでは、ヒトラー・ユーゲントは10万程度の勢力であったが、その後、1933年から200万人台へと飛躍的に人数を増やしている。ちなみに1940年以降は、戦争のためか数字を公表していないので、その数は明らかではない。

敗戦前年の1944年になお、8万人の子供たちがファナティックな世界観に陶醉し、外国の前線に派遣されている。これはまさしく集団妄想以外のなにものでもなく、いかに子供たちが容易に影響を受け易いかを物語る数字である。その結末は、「笛吹き男」伝説でも子供十字軍でも惨めなものであったが、ヒトラー・ユーゲントも例外ではなかった。

**ナチスのイデオロギーと政策** ヒトラーの支配体制の確立には、ナチスのイデオロギー、政策、プロパガンダ、デマゴギー、密告制度、集会の演出などの諸条件が大きな役割を果たした。しかしながら本質的なことは、やはりナチスのイデオロギーである。まず「世界に冠たるドイツ」という歌とスローガンは、第一次世界大戦の敗戦の屈辱感を払拭するために、大きな効果を発揮した。これがドイツ人のナショナリズムを喚起し、彼らに夢と希望を与えた。

すでに述べたように、ドイツ史のなかでユダヤ人に対する反感は根強く残っていたが、ヒトラーの反ユダヤ主義は、その感情をあおり立てた。差別的なこの人種主義は、とりわけ保守的なドイツ人のところをくすぐったのは事実である。またアーリア人の優位性を主張する血統主義やゲ

---

41 Benz, Wolfgang u. a. (Hrsg.): Enzyklopädie des Nationalsozialismus. München: Deutscher Taschenbuch, 1997. S. 513.

ルマン神話は、ドイツ人に幻想を与え、しだいにその共感者を増やしていった<sup>42</sup>。

さらに現実的に、ナチスが民衆のこころを掌握したのは、徹底して失業対策やインフレ対策をおこなったためである。彼らは世界恐慌やワイマル共和国時代の生活に苦しむ民衆に対し、国家的規模のアウトバーンを建設したり、軍需産業を興したりして、人びとの不満を解消していったが、これはナチス大躍進の最大理由であろう。

**ヒトラーのカリスマ性** ヒトラーはミュンヘン一揆の失敗を逆に神話化し、ナチスを強くアピールした。とくに「天才的」ともいえる演説の才能によって、政治運動で頭角をあらわした。彼はみずからの権力への野望を、第三帝国の「栄光の未来」へすりかえたが、これは目標を見失っていた人びとに、希望と夢をいだかせた。こうしてヒトラーは、未来への「導き手」として、人びとに力強い印象を与えることに成功した。その強烈な個性が、カリスマ性成立の大きなファクターであったといえる。

ヒトラーは魔術師と称され、その独自のパフォーマンスと言葉の技法については、よく指摘される場所である。聴衆の関心を引きつける演説やその催眠効果は、心理学、社会学、言語学など、多分野から分析・考察されているが、それは周到に計算され尽くしたパフォーマンスであり、演説であったことが明らかとなっている。

彼の魔術を助長するものとして、祭祀、党大会、集会などの演出、さらにハーケンクロイツ、赤、黒、白の旗、バッジなどが挙げられるが、これらの視覚的なシンボルが、集団妄想に重要な役割を果たした<sup>43</sup>。ヒトラーはその多くを、イタリアのファシスト、ムッソリーニから学んだといわれている。

ヒトラーの片腕としてプロパガンダに能力を発揮したゲッベルスは、次のように演説している。「国民は統一的に思考し、統一的に応答し、政

---

42 Vgl. Benz, Wolfgang: Geschichte des Dritten Reiches. München: Beck, 2000, S. 81ff.

43 Vgl. Benz 2000, S. 34.

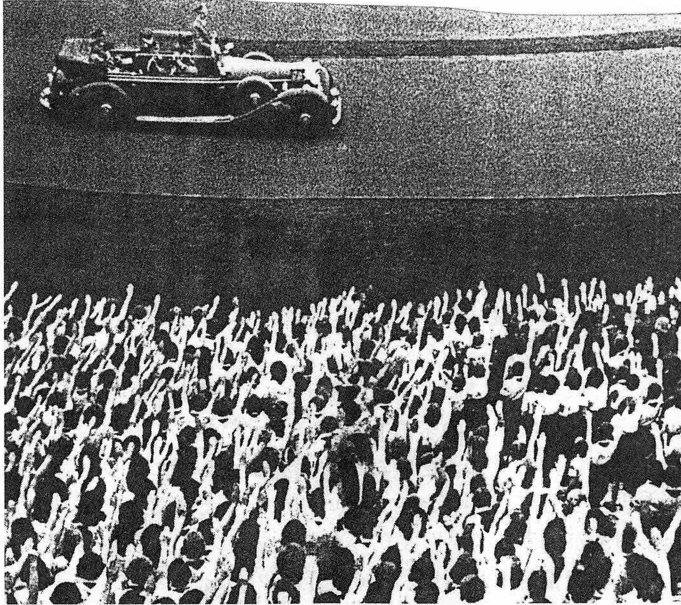


図10 ヒトラー・カルト

府に全体的なシンパシーをもたなければならない]44と。この全体主義を確立するためには、その頂点に立つヒトラーのカリスマ性が絶対に必要であった。そうでなければ、全体の統一が崩壊するからである。

全体をコントロールする手段は、プロパガンダであり、メディアを最大限、有効に活用することであった。具体的にナチスは、とくにラジオの普及をはかり、映画、活字メディアなどを通じて、徹底的な情報操作を実施していった。こうして1938年2月以降、内閣は機能せず、ヒトラーの独裁体制が確立した。

ナチスと魔女裁判のアナロジー 先述したように、魔女裁判の処刑のうち、もっとも苛酷なものは火あぶりであった。それを免れたものでも、処刑後火あぶりにされている場合が多い。火によって焼くという思想は、

44 Benz u. a. 1997, S. 42.

徹底的に抹殺することを意味するが、アニミズムでは、もともと火は神聖なもので、浄化力をもつという信仰があった。魔女を火あぶりにしたのは、抹殺と浄化というこのふたつの意味があったといえる。

ナチスが政権を取った直後に、たいまつ行列と焚書をしたことは、きわめて象徴的な出来事である。まず1933年1月30日に、ヒトラーが首相に任命されたとき、その祝いとして、ベルリンで盛大なたいまつ行列がおこなわれた。これは人びとに、ゲルマンの火祭りを連想させ、過去へのノスタルジアを誘引するものであった。

1933年5月10日の夜、反ナチス文学に対する焚書がおこなわれた。焚書の宣伝効果を上げるために、それは夜でなければならなかった。また焚書には、スローガンと見る観衆が必要であった。そこで「非ドイツ精神に抗して」というスローガンが叫ばれたが、それは魔女の死刑執行を前にして、魔女がいかに恐ろしいものであるのかを説教するセレモニーと類似したものであった。

焚書のなかには「ハインリヒ・マン、ケストナー、フロイト、トゥホルスキー、レマルク」などの本が含まれていた。このような状況のなかで、「プレヒト、デーブリーン、フォイヒトヴァンガー、ゲオルゲ、グラーフ、ハインリヒ・マン、クラウス・マン、トーマス・マン、ゼーガース、トラー、アーノルト・ツヴァイク、シュテファン・ツヴァイク」<sup>45</sup>などの著名な作家たちを含め、およそ250人が亡命した。

ナチスの攻撃は文学のみならず、劇場、音楽、映画、絵画などにも波及し、その結果、ナチス賛美の芸術のみがはびこり、国内でのナチス批判の反対派はほとんど消滅した。このようにして独裁国家が確立したのである。

**デマゴギーと密告** 集団妄想の歴史において、デマゴギーによる情報操作が重要なファクターとなっている。魔女裁判の際にも、存在もしない魔女に対するデマゴギーが流布したが、ナチスの場合の典型例は、1933年2月27日の「国会議事堂放火事件」である。よく知られているように、これは共産党によるものというデマゴギーで、共産党は徹底的な弾圧を

---

45 Benz u. a. 1997, S. 407.

被った。このような策略によって、ナチスは敵対する勢力の根絶を謀っていた。

ナチス・カルトの特徴は、よくいわれているように個人でなく、全体を中心に世界を考えることにあった。全体主義といわれる所以である。このような支配体制を支えるために、うわさや密告が大きな役割を果たしたことはよく知られている。これらをコントロールし、意のままに操ったのが、秘密警察といわれるゲシュタポであった。ゲシュタポは、警察官、連絡員、情報連絡員という組織の網を張り巡らせ、民衆を巧妙に監視した。また密告を推奨し、近隣の間人間関係に不信の念を植えつけた<sup>46</sup>。さらにはうわさを流し、それを一人歩きさせ、反ナチス主義者やユダヤ人を追い詰めていった。これも魔女裁判の告発の場合と同様な方法である。

**強制収容所と魔女の塔** 魔女を審問し閉じ込めておいた塔は、現在でもゲルンハウゼン、マールブルク、フルダなどに残っている。そこは身の毛もよだつ、暗黒の空間であった。魔女の嫌疑をかけられた女性たちは、魔術を使って逃亡するおそれから、鎖でつながれ、水と少量のパンで拷問と身に覚えのない裁判に耐えなければならなかった。彼女たちは排泄物にまみれ、ここに閉じ込められるだけで、絶望的な気持ちになり、自白する羽目におちいった。

魔女狩りおよびその裁判装置は、ナチス時代には国家規模の組織にまで拡大された。ユダヤ人たちはゲットーから駆り立てられ、ユダヤ人という理由だけで、ドイツ各地およびドイツの占領地の収容所送りとなった。魔女の塔での拷問は、今度は強制収容所、とくに絶滅収容所のなかで繰り返された<sup>47</sup>。

こうしてユダヤ人、ロマ（「ジプシー」）、反ナチスの人びとを隔離した強制収容所は、魔女裁判の場合と同様に、収容者を絶望の淵に追いやった。多い統計では、犠牲者の総数はおよそ600万人ともいわれているが、

---

46 Vgl. Benz u. a. 1997 S. 86.

47 Vgl. Orth, Karin: Das System der nationalsozialistischen Konzentrationslager. Zürich: Tendo, 2000, S. 67ff.



想像を絶する数は、ナチスの蛮行を示すものとして、記憶に留めておかなければならない。

#### 第4章 集団妄想発生メカニズム

**社会不安と集団妄想** 12-13世紀から14世紀にかけて、ヨーロッパ規模で集団妄想症候群が頻発したが、この時代の集団妄想は、全般的にみれば、キリスト教と密接にかかわったかたちで出現している。たしかに中世前期はキリスト教の上昇期に当たっていたので、ローマ・カトリックの教会ヒエラルヒーも確立し、キリスト教が民衆のレベルまで浸透しつつあった。

しかし教会が富と権力を獲得すると、民衆の純粋な信仰としたいに乖離しはじめ、宗教上の対立が生まれてきた。その結果、いくつかの異端運動が活発化し、そのなかで最大の勢力を誇ったのはヴァルド派であった。この派は聖書に立ち戻って清貧の生活を目指し、教会を無視したので、カトリックにしてみれば、それは体制への挑戦でもあった。

したがってローマ・カトリックは、一神教の原理にもとづき、台頭したヴァルド派やカタリ派などの異端を苛酷なまでに弾圧していった<sup>48</sup>が、他方、教会は異教の残滓ともいえる民間信仰とも戦わなければならなかった。一般庶民のこころのなかには、まだ異教的なアニミズム信仰が根強く残っており、これらの撲滅は、聖職者や学識者には至上命令であったからである。その際、しかしカタリ派に対する密告と拷問やアルビジオア十字軍の異端狩りも、やがて一種の集団妄想化した運動に転化していった。

中世の集団妄想症候群には、さらに中世の社会的な背景があった。これらの時代の集団妄想は、多くの場合、ケルン、アイセナハ、フランクフルト、マインツなど都市部で発生している。中世前期は「都市の空気は自由にする」いわれ、村から多くの農民が都市へ流入した。しかし都市人口の増大によって、貧困が深刻化するとともに、市民のあいだに不安感が増大していった。集団妄想にかかわったものたちの大部分は、都市市民と社会的に底辺へ追いやられた貧民であり、またすぐ信じやすい

---

48 Vgl. Dirnbeck, Josef: Die Inquisition. München: Petzold, 2001, S. 96ff.

子供たちであった。これらの事実が、集団妄想と都市の社会的状況の関係を如実に物語っている。

さらに当時の人びとにとって、決定的な出来事は、すでに触れたようにペストの蔓延であった。目の前で繰り広げられる大量死は、人間の弱さを見せつけ、人びとに世界の終末を思い起こさせた。このペストの惨状は、まさしく「神の審判」であり、神の怒りそのものであった。鞭打ち苦行や舞踏病、「死の舞踏」などの異様な集団パニック、中世のユダヤ人迫害も、その絶望的な心理状態の帰結にはかならない。

次に魔女狩りは、ルネサンスの花が開いた人文主義の時期から蔓延しはじめた。この時代は文芸が復興し、理性が勝利したようにみえた。しかし反面、古代の占星術が流行し、魔術の復権も認められ、錬金術も根強い力をもっていた。またドイツでは、ファウスト伝説が生成した時代でもあった。これは当時の民衆が、いかに魔術や呪術に対する関心をもっていたかを如実に語るものである。したがって近代初期は、中世のキリスト教の権威が揺らぎ、大きな過渡期を迎えていたといえよう。ルネサンスは価値観の転換であったが、その亀裂から非合理主義的なものも、どろどろと噴出していたのである。

さて魔女狩りは、中部ヨーロッパの農村地域、山岳地域に被害がもつとも多い。ここでは民衆の蒙昧な後進性と都市エリートとの文化的落差が大きくなり、その亀裂から集団妄想が発生したとも考えられる。さらに長年続いた30年戦争、ドイツ農民戦争、多くの戦争に敗れた傭兵の強盗行為、何度も繰り返されるペストの蔓延、これらは社会不安を増幅させ、人びとを絶望的な気分させた。

しかし魔女狩りの嵐が吹き荒れた時代背景として、当時の宗教的な状況がもっとも重要な役割を果たしている。とくに16世紀のルターの宗教改革は、南方キリスト教文化に対する強烈なプロテストであった。この宗教改革によるカトリックとプロテスタントとの対立は、世界観の危機を招き、不安な群集心理を醸成していった<sup>49</sup>。要するに、先述したような宗教的対立、俗信と自然科学の摩擦、30年戦争による人心の動揺、これらが相俟って過渡期の時代の裂け目のなかで、人びとは集団ヒステリ

---

49 Vgl. Schormann 1991, S. 21ff.

ーを引き起こし、拷問と公開処刑という狂気の魔女裁判の日々が続いたといえよう。

同様にナチスも、子供たちだけでなく大人たちに魔術をかけ、人びとを集団妄想に導いた。その土壌は、ナチスがワイマル共和国政府の解決できなかった失業や社会不安をうまく利用し、民衆の不満を吸収していったことにある。とくに第一次世界大戦の敗戦、ソ連の成立、革命、高額賠償金、インフレ、失業者の群れ、ペシミズム、ワイマル民主主義の危機、マルキシズムの台頭、世界恐慌など、時代は危機的状況をみせていた。芸術面でも、既製の概念を破壊するダダ運動、表現主義運動、社会主義リアリズム、フォルマリズムなどが渦巻く、いわば混沌とした過渡期の様相を呈していた。以上のように、集団妄想はほとんどといっていいほど、時代の危機的状況から生じていることが分かる。

**カリスマ的人物の役割** 集団妄想が発生する背景として、多くの場合、集団とカリスマという二極構造が認められる。たとえば一連の中世の集団妄想症候群は、中世の集団主義的な社会を背景に、カリスマと集団の関係によって成り立ち、とりわけカリスマが大きな役割を果たしていたといえよう。

M・ヴェーバーによれば、「カリスマ的支配は、支配者の人と、この人のもつ天与の資質（カリスマ）、とりわけ呪術的能力・啓示や英雄性・精神や弁舌の力、とに対する情緒的帰依によって成立する」<sup>50</sup>という。彼にしたがえば、カリスマ的支配者は何らかのかたちで、訴えかける特別な能力を備えた者と広汎にとらえている。しかしここで重要なのは、支配者にしたがう者は、「情緒的帰依」であるということである。これは雰囲気や気分によって左右される、きわめて不安定な関係といえよう。

たとえば子供十字軍ではステファン、ニコラウスなどは、神から委託を受けたメシアの役割を果たしている。そして彼らは子供ながらも弁舌がうまく、一種のアジテーターの素質をもっていた。人びとは彼らの説

---

50 脇本平也「カリスマ論の諸局面」、佐々木宏幹・他編『カリスマ』、春秋社、1995、4ページ参照。

教を話している人物の言葉としてではなく、神からの啓示であると受け留めた。そうであるから、人びとは奇跡を信じていた間には妄想にかかったように熱狂したけれども、それが実現できないことが明らかになると、陶酔から覚めて集団はもろくも崩壊したのである。

鞭打ち苦行でも、苦行集団を率いていた指導者がいたことが分かる。彼らは放浪説教者やペギン派修道士などであったが、教会から異端者とみられることも多かった。しかし指導者たちは、神の予言を口にし、貧民に大きな影響力を与えた。その際でも、鞭打ち苦行の群れが大きくなるときには、説教者はカリスマ的な役割を果たしたが、ベストの前では鞭打ち苦行もなんの効果がないと分かれば、ここでも指導者のカリスマ性は失われ、急速に集団は崩壊していくのである。

次にドイツでとくに有名なエアフルトの舞蹈病の場合には、聖女エリザベートに対する信仰がいかに大きかったかを物語っている。いわば彼女自身がカリスマ化され、それが子供たちの集団妄想を生み出す最大の要因であったといえよう。カリスマ性からみれば、この場合、もっとも強力であるが、それは彼女のキリストへの深い帰依にもとづいているからである。彼女が数々の奇跡を起こし、いかに熱狂的に人びとに畏敬されていたかは、『黄金伝説』に詳しくしるされている。

なお、中世にマリア信仰熱がヨーロッパ各国に広がるが、聖エリザベートはマドンナ信仰とならんでマリア信仰の系譜に属するといえる。とくに聖女エリザベートは実在の人物であっただけに、きわめて影響力が大きく、彼女を祭るマールブルクの聖女エリザベート教会は巡礼のメッカになっており、今なお信者には、カリスマ的な存在といえる。

さらに異端狩りの審問官コンラートの場合は、キリスト教に対する硬直した狂信的な信仰が、いかに大きな惨禍をもたらすかを如実に物語っている。コンラートにカリスマ的なものがあつたかどうか不明であるが、彼を増長させた最大の要因は、ローマ教皇から直接任命されていたからである。教皇の権威をかさにかけ、裁判とは名ばかりの恣意的な判決をくだすというシステムは、歯止めの効かない恐ろしい殺人マシンに変貌するのである。

これは奇しくも、ドイツの魔女裁判と類似していたことが分かる。魔女狩りが吹き荒れたところには、ヴェルツブルクやケルンにコンラート

と同様な変質的な追及者が存在したのである。さらにこのシステムは、ナチスにおいても繰り返された。ナチス時代のカリスマとしてのヒトラーと大衆の関係も、同じ構造を示しているといえよう。

**集団妄想とメディア** 子供十字軍の例でも明らかであるように、集団妄想は国を越え、病気が蔓延するように伝染していく特徴をもっている。舞踏病、鞭打ち苦行、異端狩り、魔女狩り、ヒトラー・カルトでもすべて同様である。この現象には多くのファクターが絡まっているが、まず第一に、伝播の背景にそれを受け入れる土壌があったことが共通している。それはこの章のはじめに指摘したように、社会不安、時代の危機的状況などであるが、これらが群集心理に大きく関与し、集団妄想がまたたくまに伝播していった。

しかし重要な点は、伝播の媒介としてのメディアであるが、そのもっとも原始的なものは、口から口へ伝聞するうわさである。これは中世から近代にかけて、とくに子供十字軍、舞踏病などで大きな効果を発揮した。その特徴は、「……とのことだ、……らしい」というように、その出所や主体が明確でなく、さらに尾鰭がついて一人歩きしていくことである。

魔女告発の際にも、意図的に本人に直接いうのではなく、知り合いや身内に、「あの人は魔女らしい」とうわさを間接的に流す巧妙な手法が用いられた。身近な者に流されたうわさは、そののち本人にかならず伝わる特性をもっている。あわせて密告制度も、口から伝える同じ特性を持ち、相互の不信感を増幅させた。

さらにグーテンベルクの印刷術の発明は、宗教改革、魔女狩りににおいて決定的な役割を果たした。当時は識字能力のある人は、それほど多くなかったが、それでも支配階級、あるいはカリスマはそのメディアを最大限利用することができた。たとえば、魔女狩りのバイブルである『魔女への鉄槌』は、1669年には25版を重ねており、グーテンベルクの印刷術はその普及に、大きな役割を果たしている。

しかしいうまでもなく、メディアを最大限駆使して、人びとを集団妄想にかけたのはヒトラーであった。彼はラジオ、映画、新聞を権力側に取り込み、徹底的なプロパガンダをおこなった。ラジオの普及は驚異的

であって、ナチスは放送局を国有化し、思想統制していった<sup>51</sup>。ここでは紙面の関係で、その事実だけを指摘しておこう。

**ドイツの集団妄想の特徴** 集団妄想はたんにドイツのみでなく、フランス、イタリアなどヨーロッパ各地でも発生している。たとえば異端狩り、ユダヤ人迫害の嵐などは、ヨーロッパ各地で猛威をふるった。さらに局地的に発生する集団パニックの事例は、隔離された各国の修道院や女子修道院の禁欲生活によっても生まれている。しかし全般的にみれば、集団妄想の徹底性、犠牲や被害の規模という点で、ドイツがもっとも特異な国であったといえる。

ドイツと他国のこれらの比較に深く立ち入ることはできないが、しかしそれでも、集団妄想におけるドイツ的特性について分析しておく必要がある。その際、南欧型と北欧型文化がこれに大きくかかわっているように思われる<sup>52</sup>。

南欧型文化は一般に、地中海地方の地母神的多神教に由来し、集団妄想にも関係のあるオルギアが認められるが、それはギリシャ・ローマのディオニソス、バッカス、サトゥルヌスなどの豊饒信仰をルーツにしている。また女神信仰は、キリスト教下においてポジティブには熱狂的なマリア信仰、マドンナ信仰などを生みだした。しかしその反面、ネガティブには黒マリア信仰や黒ミサ、サド、マゾなどの性的オルギアを引き起こしていった。しかし多くの場合、南欧型の集団妄想や熱狂は、カーニバルなどの祭りの陶酔や発散によって抑制され、これが社会の安全弁の役割を果たしてきた。

北欧型文化は地中海的な温暖な南欧型文化と異なって、北方ゲルマンの遊牧民に由来し、男性的な特徴がある。同じキリスト教国とはいえ、それは南欧の比較的寛容な姿勢と違って、性的オルギアが少ない反面、きびしい気候風土にもとづく父権的な烈しさが認められる。この特徴はルターの宗教改革以降にもあらわれ、ルター派、カルヴァン派の禁欲、貞潔のエートスの根源にもなっている。

---

51 Vgl. Benz 1998, S. 34ff.

52 Vgl. Gloger 1999, S. 94.

そのようなゲルマン的な特性は、北欧型の集団妄想をも規定し、民衆が一定方向へはげしく突き進んでいく傾向を生みだしたが、また当局側も、徹底して弾圧をするシステムをもつくりだしていった。さらにそれは、北国特有の内面性や音楽性ともいうべきもの、すなわちデモーニッシュな、非合理主義精神と密接に結びついていたといえる。ここにドイツ的集団妄想の特徴が認められる。

このドイツ的ともいえる負の側面の発生は、一般論化していえば、知識人はともかく、民衆レベルでの個の成立が遅れたことによると考えられる。たしかに確固とした個は、分裂していた領邦国家ドイツではフランスやイギリスに比べると、成立するのが遅かった。ヨーロッパ先進国では理性や個が、非合理的な動きを抑えてきたが、それが未成熟であったドイツでは、民衆は理性の歯止めが効かず、集団妄想にかかる可能性が高かったといえよう。しかしそうはいつでも、これは発生の基盤にすぎず、ドイツの場合、突き動かす要因はもっと情緒的なものであった。

ドイツの集団妄想は、さらに掘り下げていけば、歴史の底流にある原始のアニミズム、ゲルマン神話の世界、民間呪術や魔術などに由来するのではなからうか。たしかにドイツがキリスト教化される過程において、ローマ・カトリックはこれらの習俗を迷信と断罪し、きびしく対決してきた。また教会は異教の神々を辺境の地へ追放したり、地下へ封じ込めたり、さらに悪魔や魔物に歪曲して押さえつけてきた。

その確執は、勝利したキリスト教の側から連綿と語り継がれている。たとえばよく知られているように、ゲルマン民族は森の民であり、樹木信仰をもっていたが、それを攻撃したのは聖ボニファティウスであった。彼は森や樹木を執拗に切り倒し、ゲルマンのトール神のシンボルであったオークから十字架をつくったといわれている。結果的にボニファティウスは布教中に殉教し、キリスト教の聖人として祭られた。

こうしてドイツの地は、表面的には完全にキリスト教化され、異教的要素は歴史の底に沈潜してしまっただけのようにみえる。しかしそれは表面上のことで、封じ込められ、抑圧されたエネルギーは、ドイツ史の底に脈々と流れており、歴史の裂け目から、ときおりマグマとなって噴出してくるのである。

たしかにそのうち、「笛吹き男」伝説、舞踏病、鞭打ち苦行などは、取

るに足りないものかも知れない。しかしここに、内面から噴出してくる集団妄想の情緒の原型と前史が認められる。しかしとりわけデモーニッシュな集団妄想は、先述のように魔女狩りとナチスのカルトである。とくにナチスは、ゲルマン文化への回帰を標榜したことで知られている。ドイツの歴史的な経緯を考察すれば、ここにもキリスト教以前のアニミズム的な基層文化と、キリスト教文化の衝突や矛盾の基本構造が明瞭に浮かび上がってくる。

ドイツ史のなかで、異教的デーモンとキリスト教の対立を敏感に体得していたのは、皮肉なことにユダヤ人作家ハイネであった。かれは表層のキリスト教文化の下に、異教のどろどろとしたデーモンが流れているのをじゅうぶん承知して、『ドイツの宗教と哲学の歴史に寄せて』（1834）を書いた。

ハイネは、かつてキリスト教に抑圧された「古いゲルマンの汎神論のデモーニッシュな力」<sup>53</sup>が復活し、ヨーロッパで大暴れすることを明確に予言し、とくにフランス人にそれを警告している。ハイネの指摘は、約100年後に登場したナチスが、ヨーロッパを蹂躪した状況とあまりに類似していると見えるであろう。ナチスは明らかにゲルマンの後身であると位置づけられるからである。

また神話学や文献学を究めたグリム兄弟も、ドイツのキリスト教文化がゲルマン文化の上に成り立っていることを、もっともよく理解していた。またゲーテはイタリア旅行によってギリシア・ローマ文化を体験し、ドイツ文化の二極性をじゅうぶん把握していた。さらに南国の血の流れるトーマス・マンも、ドイツ文化の二重構造を洞察し、ナチスの本質を的確に分析している。

もはや予定した枚数を大幅に超過してしまったので、最後に、以上述べた二極性のバランスが崩れた事例を挙げておこう。ナチスの時代の強制収容所で、その幹部たちが日常的にユダヤ人を死の淵に追いやりながら、「囚人のオーケストラ」を結成させ、その奏でるクラシック音楽を感動しながら聞いていたという。この人間的なものと非人間的なもの

---

53 Heine, Heinrich: Historische-kritische Gesamtausgabe der Werke. Bd. 8/1. Hamburg: Hoffmann und Campe, S. 118.



りなすグロテスクな二極性は、ドイツに巣くう病根の奥深さを物語っている。

たしかにナチスの狂気は、デモーニッシュな非合理主義の帰結であったといえようが、現代のドイツはナチスの過去を克服し、その呪縛から逃れている。もはやドイツ人は、デモーニッシュな媚薬にふたたび魅了されるはずがないであろう。

しかしそうはいっても、多くの外国人を内包しているドイツで、いつ不気味なナショナリズムが台頭してくるかも知れない。ネオナチも節目節目で不気味に胎動している。その意味において、本論の集団妄想の系譜に関する考察がなんらかの教訓となればと、今はただそう願うだけである。

#### 図版出典一覧

- 図1 Schenck, Gustav (Hrsg.): Aberglaube, Angst und Terror. Stuttgart, Phaidon, 2000, S. 164.
- 図2 Dirnbeck 2001, S. 129.
- 図3 Pleticha (Hrsg.) Bd. 4, S. 248.
- 図4 Pleticha (Hrsg.) Bd. 4, S. 242.
- 図5 Hammerstein 1980 (Abbild).
- 図6 Pleticha (Hrsg.) Bd. 4, S. 255.
- 図7 Löblich 2001, S. 66.
- 図8 Dirnbeck 2001, S. 483.
- 図9 Schulte, Rolf: Hexenverfolgung. Heide: Boyens, 2002, S. 74.
- 図10 Benz 1997 (Umschlag).

## Zum Problem des Massenwahns in der deutschen Geschichte

Takashi Hamamoto

Es ist besonders bemerkenswert, dass zu verschiedenen Malen in der deutschen Geschichte vom Mittelalter bis zur Hitlerzeit Massenwahn auftrat, zum Beispiel: Kinderkreuzzüge im 13. Jahrhundert, Judenpogrome während der mittelalterlichen Pestseuche, Veits- und Totentanz im 13-15. Jhd., Hexenwahn und Hitlerkult. Dabei verfiel man auf irrationalen Weg in Zustände von Bessenheit und Wahnsinn; Reflektion entfiel weitgehend. Bei Massenwahn wurden meist viele Menschen getötet oder geopfert.

Warum entstand dieses merkwürdige Phänomen gerade in der deutschen Geschichte? Ist es vielleicht ein typisch deutsches Erzeugnis, obwohl man zuweilen Ähnliches in Europa beobachten kann? Vorliegende Abhandlung beleuchtet dieses Problem.

Im 13. Jhd. entschlossen sich nicht nur Erwachsene, sondern auch viele Kinder, unter starkem Einfluß von Kreuzzug und begeisternder Agitation, ins Heilige Land, nach Jerusalem, zu gehen. Ein Knabe namens Nikolaus hielt in Köln eine Rede über den Kinderkreuzzug. Viele Kinder sammelten sich um ihn und traten in einer Gruppe den mühsamen Weg über Frankreich nach Italien an. Am Strand, nicht weit von Genua, beteten die Kinder zu Gott wie Moses, der in der Bibel durch ein Wunder das Meer durchquerte, aber die See teilte sich nicht für die Kinder. Sie gingen im Elend auseinander, und nur wenige konnten nach Deutschland zurückkehren.

Die große Pestseuche griff besonders im 14. Jahrhundert fast in ganz Europa um sich. Man hatte große Angst und Leute verbreiteten das Gerücht, dass die Juden Brunnen vergiftet hätten und die Ursache der Krankheit seien. Durch diese Agitation entstanden in einigen deutschen Städten große Pogrome gegen Juden.

Es ist bekannt, dass im 16-17. Jahrhundert viele Frauen als Hexen verdächtigt und der Folter unterworfen wurden. Besonders heftig waren Hexenverfolgungen in Mitteldeutschland, in Würzburg und Bamberg. Man vermutete, dass dabei etwa 50,000 Menschen hingerichtet wurden. Es war ein trauriges Ereignis in der deutschen Geschichte. Diese Zeit war die Übergangsperiode von der alten zur neuen Weltanschauung. Eine Ursache des Hexenwahns lag in der religiösen Spannung zwischen Katholiken und Protestanten.

In der Weimarer Zeit stand Deutschland wirtschaftlichen Schwierigkeiten gegenüber. Es gab viele Arbeitslose, die Gesellschaft geriet in Unordnung. 1933 übernahm Hitler die Regierung. Er überwand die Wirtschaftskrise und man begeisterte sich für seine Reden, für Massendemonstrationen und die schier wahnsinnige Propaganda des Nationalsozialismus. Aber die Folge seiner Kriegspolitik war bekanntlich, dass Hitler den Untergang Deutschlands auf vernichtende Weise herbeiführte.

Wie wir oben schon sahen, trat Massenwahn am häufigsten in sozialen oder weltanschaulichen Krisen auf. Man kann also sagen, dass seine Ursachen im großen und ganzen im Zusammenhang mit der Übergangszeit der Gesellschaft stehen. Wenn man große Angst verspürte, glaubte man sehr leicht auch den Gerüchten; dadurch verfiel man einer Welt der Verrücktheit.

Dazu kann man auch wohl sagen, dass die Deutschen zum dämonischen Charakter und zur seelischen Innerlichkeit neigen. Es handelt sich hier nicht um die Vernunft, sondern um die Irrationalität. Dabei konnte das Charisma als Agitation, die zum Massenwahn führte, eine große Rolle spielen.